

---

# 在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティの多様性に関する調査研究

—日本学校在学生と朝鮮学校在学生の比較を中心に—

## **A Study on the diversity of ethnic identity of Koreans in Japan:**

— Interview Survey  
among Korean Students in Japanese Schools and Korean Schools —

曹 慶鎬\*

CHO Kyongho

---

The purpose of this paper is to understand the characteristics of the ethnic identity of the younger generation of Koreans in Japan, focusing on the differences in the school experience. Ethnic identity of the younger generation of Koreans in Japan is diverse, and grasping its full aspect is difficult. This paper tried to understand the characteristics of each ethnic identity, based on an interview survey among Korean students in Japanese schools and Korean schools. Ethnicity becomes a factor that leads to conflict for Korean students in Japanese schools. And conflict has a great influence on the formation of ethnic identity. On the other hand, for students in Korean schools, the self-awareness of being Koreans in Japan is familiar. Korean school students can be evaluated as being positive about their own ethnicity without clear evidence.

---

\*立教大学兼任講師

## 1. はじめに

本論文の目的は、学校体験の違いに着目した上で、在日朝鮮人の若い世代におけるエスニック・アイデンティティの多様性を把握することである。

ここで言う在日朝鮮人とは、国籍の如何にかかわらず、植民地時代の朝鮮半島にエスニックなルーツを持つ人々である。『在留外国人統計』によると、2011年時点で朝鮮籍、韓国籍保有者は約55万人となっているが、それは主に1980年代以降に日本に渡ってきたニューカマー韓国人が含まれた数字である。植民地時代に起源をもつ者がほとんどを占める特別永住者は、そのうちの約39万人である。他に帰化者が累計約34万人いる<sup>1)</sup>。

在日朝鮮人内部では世代交代が進んでいる。『国勢調査』によると、在日朝鮮人のうち日本生まれの者は1930年の時点では約8%にすぎなかったが、1950年には約50%、『在留外国人統計』によると1974年には約76%になっている。日本生まれの在日朝鮮人は朝鮮半島生まれの1世と比較して、朝鮮語をはじめとする朝鮮半島由来の言語や文化に親しむためには、多くの努力を重ねなければならない世代である。特に言語に関しては、割合としては決して多くない民族学校在学経験者や大韓民国(以下、韓国)への留学経験者等を除くと、簡単な単語以外は朝鮮語を理解しない者が大多数を占める。彼らと日本社会との結びつきは強く、それだけ朝鮮半島への帰属意識は弱くなっている。

このような世代交代を背景に、在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティの多様化が指摘されて久しく、先行研究の蓄積も相当のものがある。そのなかでも興味深い先行研究として、福岡安則と金明秀の協力のもとに在日本大韓民国青年会(以下、青年会)が1993年に行った調査がある[福岡・金1997]。日本生まれの18歳から30歳の韓国籍保有者を母集団とし、標本の抽出に青年会が保有する名簿を使用したこの調査は、調査時点が若干古く、対象が韓国籍保有者に限られているという制限はあるが、在日朝鮮人の若い世代を対象とした全国サンプリングを行った稀有な調査であり、現在においても多くの示唆が得られる。この調査で得られたデータをもとに福岡と金はエスニシティの形成要因として、「成育地域内同胞数」「父親の職業階層」「成育家庭内の民族的伝統性」「年齢」「性別」「本人の達成学歴」「受けた民族教育の程度」「被差別体験の程度」「民族団体への参加経験」を吟味の俎上にのせた上で、この中で「成育家庭内の民族的伝統性」と「受けた民族教育の程度」の二つの要因が他と比べて抜きんでて大きな影響力をもつと指摘している。

エスニシティの形成に影響をおよぼす要因が抽出されるのであるならば、在日朝鮮人の間に、その要因からの影響の程度に基づいた特徴ないしは傾向の違いが確認でき

るはずだ。特に「受けた民族教育の程度」という要因と関連して、日本で一般的な日本学校で学んだ者と、「民族教育」の成分が濃厚であろう民族学校で学んだ者との間には、異なる傾向がみられるだろうことは容易に想像できる。

そこで本論文では、「成育家庭内の民族的伝統性」を横目で眺めつつ、「受けた民族教育の程度」に着目し、日本学校で学ぶ在日朝鮮人と、民族学校のなかでも朝鮮学校<sup>2</sup>に在学する者を対象にインタビュー調査を行った上で、両者のエスニック・アイデンティティの形成に関する比較分析を試みた。朝鮮学校に関する先行研究に目を向けると、しばしば教育内容と学校制度の把握に力が注がれる一方で、アイデンティティの形成において重要とされる周囲の人間との関係性について検討を加えた調査研究は、それほど多くなかった。そこで本論文では、学校での教育内容を踏まえつつも、それよりも学生が一日の大半を過ごす、学校という場で形成される周囲の他者との関係性に注目することとする。

記述の順序としては、まず日本で生まれ育った在日朝鮮人のアイデンティティと、朝鮮学校および朝鮮学校在学経験者のアイデンティティに関する先行研究についてまとめ、合わせてインタビューデータの分析の補助線とするべき論考について触れる。そして調査の概要を示しつつ、インタビューデータを分析し、最後に結論を提示する。

## 2. 先行研究

### 2-1. 日本で生まれ育った在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティについて

比較的早くに在日朝鮮人に関する統計的資料を整理し、そのなかで世代交代の進行に注目した論者の一人が姜在彦である。姜在彦は1976年に発表された論文で、在日朝鮮人内部での世代交代に注視しつつ「在日朝鮮人問題の性格そのもの」[姜1976: 34]が変わってきたと述べる。それでは世代交代で在日朝鮮人の中堅層として登場してきた日本生まれの世代とは、姜在彦にとってどのように理解されているのか。朝鮮半島生まれの1世と比較して、その特徴は端的には次のように指摘される。

おおまかにいって、朝鮮生れの世代は、祖国にたいして「郷愁」によってつながる世代であるとするならば、日本生れの世代は多くのばあい、「在日」そのものを与えられた前提として生きている世代といえるかも知れない[姜1976: 36]。

朝鮮半島と「郷愁」でつながっている1世と比較して、日本で生まれ育ったということを前提としている2世以降の世代。そのような在日朝鮮人の若い世代の「大多数が日本の学校で学び、日本社会のなかでバラバラに生きている」[姜1976: 34]と姜は述

べる。別の論文では「在日朝鮮人の分布が少ない地方では、排他性の強い日本人社会の中での孤立感を深め、日本人化した生活が強いられ、同胞間の接触も少なく、子女たちの結婚や就職の機会も、大都市に比べて少ない」[姜1980: 27-28]とも指摘している。実際、在日朝鮮人と一括りで語られたりもするが、自身の家族や親族以外の在日朝鮮人と会ったことがなかったという経験談を目にするのは決して珍しいことではない<sup>3</sup>。姜在彦は、在日朝鮮人に同化を促しかねない日本社会において、在日朝鮮人の日本人化が進むことに警鐘を鳴らしているのである。

だが、さらに世代交代が進むなかで、若い世代にとって、日本社会への同化に対する警鐘が、時に桎梏となるに至ったことを指摘するのが、金泰泳である。まず金は、朝鮮半島生まれの世代においては日本社会からの圧力に対する対抗の手段こそがエスニシティであり、その際に「一枚岩的な在日朝鮮人アイデンティティ」[金1999: 94]が形成されていったことを指摘する。だが、世代交代が進む中で、日本生まれの世代にとって、このような「在日朝鮮人アイデンティティ」は「自己とそして他者を抑圧・疎外する機能を果たす」[金1999: 128]ものになってしまったという。そして金は、エスニシティが自己を抑圧するものとして立ち現れるなかで、アイデンティティを模索する若い世代の一例として、学校での名乗りを、朝鮮名から日本名へと変更したある在日朝鮮人3世の生徒を取り上げる。金は、そこに「柔軟なアイデンティティ」[金1999: 195]の可能性を見出すことを試みる<sup>4</sup>。

一方で、日本社会への同化がさらに進むうちに、そもそも自身が在日朝鮮人であるということすら、一定の年齢になるまで知らないということも珍しいことではなくなった。「僕は、16歳になって外国人登録証を持つことになり、そのとき初めて朝鮮籍であることを母に説明してもらいました」[セフルム編2004: 65]といった体験談が、その典型である。

世代交代とともに顕著になった在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティの多様化は、ここまで進んでいる。それを調査に基づいた上で、最も明確に指摘する者のうちの一人が福岡安則である。福岡安則は、主に3世以降の在日朝鮮人への各種の調査に基づいた上で「従来、「民族意識」を強固に維持していこうとするタイプと、日本社会への「同化」を強めていくタイプとの二極分解といった構図で、在日韓国・朝鮮人のアイデンティティのありようが捉えられてきた。だが、若い世代のアイデンティティの模索のありようは、もっと多様化している」[福岡1993: 79]と指摘する。そして、「共生志向」、「祖国志向」、「個人志向」、「帰化志向」、「同胞志向」という形で在日朝鮮人の若い世代の志向性を分類している<sup>5</sup> [福岡1993: 89-99]。すでに在日朝鮮人は「帰国」か「同化」という形で単純に分類できるものではなくなったということが、この議論が

らうかがえる。

このように少なくとも調査研究に限れば、在日朝鮮人の世代交代を踏まえた上で、多様化するエスニック・アイデンティティの把握が進んでいる。

## 2-2. 朝鮮学校および在学経験者のエスニック・アイデンティティについて

朝鮮学校は在日朝鮮人を対象とした全日制の学校である。植民地統治時代に朝鮮語を学ぶことのできなかった在日朝鮮人の子どもたちに朝鮮語や朝鮮の歴史を教えるために、1945年8月15日の終戦直後から作られた寺小屋式の「国語教習所」にその起源をもつ[金2004]。教育目的は「朝鮮民族としての自覚と誇りをもって堂々と未来を切り開いていける人材を育成」[卞・全 1988: 178]することとされており、授業科目には朝鮮語や朝鮮史が存在している[ウリハッキョをつづる会編2001: 139-141]。このような教育は、見方によっては、先行研究のいう「一枚岩的な在日朝鮮人アイデンティティ」[金1999: 94]という範疇にあると捉えることも可能であろう。

日本の学校制度に合わせて6年・3年・3年制をとっており、2012年4月時点で、日本の小学校に相当する初級学校55校、中学校に相当する中級学校33校、高校に相当する高級学校10校、他に大学相当の大学校が1校存在する。法的には「各種学校」として位置づけられている。朝鮮民主主義人民共和国(以下、北朝鮮)を支持する在日本朝鮮人総連合会(以下、総連)の影響下にあるが、国籍等にかかわらず全ての在日朝鮮人を教育対象としているため、朝鮮籍および韓国籍だけではなく日本国籍その他の学生も在学している。

1960年代には3万5,000人を超えた学生数は、近年、減少傾向にあるといわれている[金2004: 274]。現在の朝鮮学校在学生数は未公表のため、正確なところはわからないが、朝鮮大学校の教員である朴三石によると、幼稚園に相当する幼稚班を含めた朝鮮学校全体の学生数は約1万人、うち高級部に在学する者が1,800人であるとされる[朴2011]。同資料によると、現在までの朝鮮高級学校の卒業生は累計で約10万人、朝鮮大学校の卒業生は約1万5,000人であるという<sup>6</sup>。

これまで朝鮮学校在学生を対象とした調査研究は決して多くなかったが、昨今は、若干ながら数が増え、たとえば学校生活を送る学生たちの特徴(ある種の「明るさ」)を捉えた研究も現れている[宋2012; 山本2013]。だが、本論文の主題が、日本学校と朝鮮学校それぞれの在日朝鮮人学生たちの、エスニック・アイデンティティの形成の比較ということから、若い世代の在日朝鮮人の意識の多様性を指摘しつつも、そのなかに朝鮮学校在学経験者らを位置付けて論ずる福岡安則の研究をまずは参照する[福岡1993]。

福岡は、朝鮮学校在学経験者を主に「祖国志向」タイプと自らの枠組みに位置づけた上で、その特徴をまとめている。朝鮮学校在学経験者らの特徴は、小学校から高校、あるいは大学まで朝鮮学校在学することで、朝鮮語や朝鮮史、朝鮮文化を学んでいることから、自明のものとして「民族の誇り」を内面化しており、その生き方のモデルは「祖国の朝鮮人」であるという。そして、朝鮮学校卒業生のうちの少なくない者が、「在日朝鮮人社会」に帰属することで、在日朝鮮人とのつながりを維持しているという。福岡の指摘は、植民地統治の間に失われた朝鮮語や朝鮮の歴史に関する知識を獲得するために、朝鮮語や朝鮮史の教育を行うことで、「民族の自覚と誇り」を持てるようにするという朝鮮学校の教育目的と極めて親和的である。一方で、福岡は朝鮮学校在学経験者らも、他の在日朝鮮人と同じように、アイデンティティの葛藤を余儀なくする状況から自由ではないと指摘する。それは端的に「民族意識」を強固にもつ「祖国志向」タイプの若者であっても、モデルとしての“祖国の朝鮮人”そのものにはなりえない[福岡1993: 104]からだという。

このような福岡の指摘と並べると興味深いのが、韓東賢の指摘である[韓2005]。韓は朝鮮学校在学経験者らに「朝鮮学校コミュニティ」に対する強い肯定感が散見されることを指摘する。そのような朝鮮学校在学経験者のエスニック・アイデンティティを「マイノリティという「負の自覚」のないエスニック・アイデンティティ」[韓2005: 219]と韓は暫定的に呼ぶのだが、これは決して日本学校での在学経験のみを有する大多数の在日朝鮮人にあてはまりうるものではないと指摘する。

「どちらでもない私」といったアイデンティティの揺らぎの中で生きる「在日」という一般的な認識と、マイノリティ意識が薄く「在日」という自明性の中に生きる「朝鮮学校生」のリアリティの間にはかなり距離があるように感じる。[韓2005: 214]

韓の見解は、ある部分において福岡の指摘と共通するが、異なる部分も存在する。まず、両者ともに朝鮮学校在学経験者がその他大多数の在日朝鮮人とはエスニック・アイデンティティにおいて異なる特徴を示すと指摘する。そして、朝鮮学校在学経験者における、自身のエスニシティと朝鮮学校とその周辺コミュニティに対する肯定感の存在という韓の推測は、「民族の誇り」や「在日朝鮮人社会」という言葉を用いて行われた福岡の指摘と共通する。その一方で、福岡にみられる朝鮮学校在学生は規範的モデルとしての「祖国の朝鮮人」にはなりえず、アイデンティティの葛藤を余儀なくされる状況から自由ではないという指摘は韓には存在せず、その代わりに「マイノリティ

意識」に乏しいという指摘があるだけである。ただし、福岡の指摘が調査に依拠するものである一方で、少なくとも参照した論考では、韓の見解は調査データによって裏付けられていないことは付言しておく。

### 2-3. 在日朝鮮人のアイデンティティ形成過程における契機

ここではインタビュー調査で得られたインフォーマントの語りを具体的に分析する際の補助線とするべく、在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティの形成過程に関する浜本まり子の論考について検討する[浜本1996]。「朝鮮人としての自己意識が形成される一つのモデルを示す」[浜本1996: 241]ことを目的とするこの論考の考察対象は、植民地時代から日本に居住している朝鮮半島出身者とその子孫であり、かつ自身が在日朝鮮人であるという認識をもつ者である。

この論考は、すでに在日朝鮮人の若い世代においては、日本人との目立ったエスニックな差異が確認できなくなっており、日本社会に溶け込んで生活しているという点から考察がはじまる。それは「青年期になるまで自分が朝鮮人であることを全く知らない、むしろ、知らされていないケースは、在日朝鮮人の間ではそれほど特異ではない」[浜本1996: 244-245]という状況である。

浜本によると、このような状況において自らが在日朝鮮人であるという認識を獲得するということは、同時に自らが「日本人であることを否定」[浜本1996: 249]することを必然的に意味するという。その上で圧倒的な日本人の影響力を前にして、在日朝鮮人の若い世代は自らが在日朝鮮人であることを隠蔽するとされる。すなわち「日本人でないことを否定」[浜本1996: 249]するということである。ここでいう日本人でないことの否定とは、在日朝鮮人であることの否定を同時に意味する。その過程で、否定されるべき対象としての在日朝鮮人像が獲得される。それは「ニンニク臭い、ずるい、馬鹿だ、不潔だ、劣っている等々。まさに恥ずべき存在としてのイメージ」[浜本1996: 249]という日本人の持つ朝鮮人に対する否定的イメージであるという。

まとめると、①在日朝鮮人との関係性の欠如ないしは希薄、②「日本人であることの否定」という意味での第一の否定、③「日本人でないことの否定＝在日朝鮮人であることの否定」という意味での第二の否定の3点が、この論考から見出せる在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティの形成における前提状況と重要な契機となる(表-1)。

表-1 在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティの形成における前提状況と契機

項目	認識
前提状況	在日朝鮮人との関係性の欠如／希薄
第一の否定	日本人であることの否定
第二の否定	日本人でないことの否定＝在日朝鮮人であることの否定

この論考は、浜本のいう在日朝鮮人の「マイナスのアイデンティティ」[浜本1996:249]の形成過程が手際よく整理されており、在日朝鮮人との関係性が希薄で、エスニックな特徴に乏しい現在の在日朝鮮人の若い世代の、葛藤をはらんだアイデンティティの形成過程の一面をうまく捉えていると思われる。そこで、本稿においても、インタビューデータの分析の際の補助線として参照する。

### 3. 調査と分析

#### 3-1. 調査の概要

インタビューデータの分析に先立ち、調査の概要について説明する。日本学校に在学する在日朝鮮人学生を対象とした調査は、2001年から2002年にかけて、在日朝鮮人の若い世代のアイデンティティと朝鮮半島に対する認識の関係をテーマに行った。日本学校在学生向けの民族学習プログラムを実施している関係者を通してインフォーマントを募った結果、関東地方の大学・短大・専門学校に在学中の在日朝鮮人学生にインタビューを行うことができた。朝鮮学校在学生を対象とした調査は、2004年に朝鮮学校での在学経験に基づくエスニック・アイデンティティの形成とコミュニティへの帰属意識との関係をテーマに行った。朝鮮大学校の卒業生を通してインフォーマントを募った結果、朝鮮大学校に在学中の学生にインタビューを行うことができた。インフォーマントの基本属性は次のとおりである(表-2)。

表-2 インフォーマントの基本属性

	日本学校在学生	朝鮮学校在学生
年齢	18～23歳	18歳～22歳
性別	女性10人／男性7人	女性6人／男性15人
世代	3世16人／2.5世1人	3世19人／3.5世2人
在学経験	日本学校のみ	朝鮮学校のみ

注1) 年齢はインタビュー時。

注2) 世代の2.5世は1世と2世の親から生まれた者、3.5世は2世と3世の親から生まれた者。

インフォーマントの全員が日本で生まれ育った在日朝鮮人である。日本学校在学生は全員が小学校から日本学校に通っており、朝鮮学校在学した経験は有していなかった。一方、朝鮮学校在学生は小学校に相当する初級部より朝鮮学校に通っており、



日本学校に在学した経験はなかったのだが、その親も朝鮮学校在学経験者であったことを付言しておく(両親ともが16人、片親のみが5人)。

インタビュー時に関東地方の教育機関に在学中であった日本学校在学生調査の全インフォーマントのうち、3名を除いた14名が関東の高校に通っており、関東地方で生活を送っていた。朝鮮大学学校在学中のインフォーマントらの大学入学以前の生活地域は、関東地方と関西地方を中心に、北海道から中国地方までの多岐にわたる。だが、日本学校在学生および朝鮮大学学校在学生を対象にした両調査において、インフォーマントのエスニック・アイデンティティの形成に、高校以前の生活地域が及ぼした影響は、それほど鮮明には確認できなかった<sup>7</sup>。

それよりも、特に日本学校在学生に大きな影響を及ぼしていると思われるのが、民族学習プログラムである。17名中12名が高校在学期間までに何らかの民族学習プログラムを体験しており、これを通じてエスニシティに関する知識を幾分か獲得したり、在日朝鮮人の数少ない友人を得た者もいる。さらには、学習プログラムの体験に際して親の後押しがあったことも一部で示唆されていることから、インフォーマントの親も、インフォーマントがエスニシティについて学び、在日朝鮮人との関係をつくることの重要性について、ある程度理解があったことがうかがえる。そのような親であるから、家庭内において伝統的文化が多少なりとも残っていたとしてもおかしくはないだろう。だが、このような学習プログラムの体験者は、日本学校在学中の同世代の在日朝鮮人のなかでは決して多数派とは言えないことは留意しておくべきである。

調査の際には、基本的属性等について質問文を用意した上で、それをもとに調査テーマに関連する話題を投げかける形でインタビューを行ったが、こちらが用意した質問にとらわれないインフォーマントからの自由な発言も聞いていった。事前に準備した議題とインフォーマントからの自由な話題との比率は、概ね1対2ぐらいであった。そのため多岐にわたる内容の話題を聞き取ることができたが、本論文では、学校体験とエスニック・アイデンティティの形成に関するデータのみを利用している<sup>8</sup>。なお、インフォーマントの発言内容については、調査後にすべて本人に確認をもらっている。

以下では、このような調査で得られたインタビューデータを、先にみた論考を補助線にしてまとめていく。最初に日本学校在学生調査について、次に朝鮮学校在学生調査についてみていく。

### 3-2. 日本学校在学生調査

#### (1) 日本学校在学生調査－前提状況

インフォーマントのほとんどが、日常生活において家庭の外で在日朝鮮人と出会うことは皆無であったと述べている。高校生になって、民族団体が主催する民族学習プ

プログラムを体験したというあるインフォーマントは、そのプログラムの場で多数の在日朝鮮人が一堂に会している風景を初めて見たときの驚きを次のように語っている(以下、インタビューデータの末尾に性別とインタビュー時の年齢を示す)。

いやあ、ビックリしました。とりあえず人数が多いのに。しかも…これの何十倍もいるっていう話、聞いたんですけど。これで何十倍もいるのか、知らなかったな、とか思っただ。(男性／18歳)

実際、学校には、自分以外に在日朝鮮人らしい者がいたような記憶があると述べた者も若干いるが、クラスの在日朝鮮人は自分一人だけだった、と答えた者がほとんどであった。インフォーマントのほとんどが少なくとも高校入学以前までは、家族および親族以外の朝鮮人同士の関係の希薄または欠如という状況にいたことを確認できる。

## (2) 日本学校在学生調査—第一の否定

インフォーマントの全員が、自分が在日朝鮮人であるということを、幼い頃から両親から聞かされて育ってきたという。たとえば、以下のような意見がある。

親父が言うには…どこに行こうが、自分の気持ちしだいと。だから、名前はどっち使ってもええ、気持ちさえ、自分の国ことを忘れなければ、それはそれでいいし。だから親父が言うには、別に日本に帰化して、そっちの方が将来的に自分がやりやすいようだったら帰化してもいいけど、根本的なもんは自分が朝鮮人だというのは、それだけは忘れるなっていう考えなんですけど。(男性／21歳)

このインフォーマントは、このような父親の意見にほぼ同意できるという。これまで同世代の在日朝鮮人とのつきあいはほとんどないというが、このような気持ちさえもっていれば、それで十分であろうと述べている。朝鮮名の使用や朝鮮語の習得については各々異なるが、インフォーマントのほぼ全員が、何らかの形で親から、少なくとも自身が朝鮮人であるということを知っているべきであると教えられてきている。そのような親であるから「年に5、6回ぐらいチェサ(祭祀：民族伝統の法事)とかあったんで…。キムチとかありましたし」(男性／20歳)という語りによって代表されるように、家庭環境に民族文化が残っていたことがうかがえる。すなわち「育成家庭内の民族的伝統性」等の要因により、自身が在日朝鮮人であるという認識は自然ともっていたと

推測される。

だが、初めての外国人登録の際に自身が在日朝鮮人であるということを知る者もいるだろうと推測するインフォーマントは存在した。先行研究や体験談で自身が在日朝鮮人であることを知らずに育った者の存在が指摘されているにもかかわらず、インフォーマントとできなかったことは本調査の限界の一つである。

### (3) 日本学校在学調査—第二の否定

インフォーマントらは学校における日本人学生たちとの関係のなかで、自身のエスニシティについてどのように受け止めるようになるのか。一昔前は、在日朝鮮人ということから、学校で嫌がらせを受けたりするケースが少なくなかったようだが、そのような経験を語った者はほとんどいなかった。日本人学生との衝突を体験した者は若干名だが存在したが、露骨な暴力を振るわれたケースはほとんどなく、たとえ嫌がらせがあったとしても、それに対して泣き寝入りするよりも、むしろ即座に腕力で対抗していた、とのことであった。ただし、実際の嫌がらせなどは経験していなくても、親の体験談などを通して、そのようなトラブルを避けるために気を配ったと述べる者は相当数存在した。

注目すべきは、周囲とのトラブルの有無とは関係なく、周囲と自らのエスニシティが違うことについて深く考えた経験を有すると答えた者が多かったことである。だが、日本で生まれ育ち、日本語で生活してきたインフォーマントのなかで、日本語ができないものなど存在しない。外見上も日本人とは区別がつかない。そのようななかで、自らのエスニシティを認識するということは、どういうことなのだろうか。その点を示唆するのが次の語りである。

…まわりと違うっていうのは、やっぱり結構、子供心になんか気になるじゃないですか、別に朝鮮人が嫌だとかじゃなくて、やっぱり周りと同じでありたいっていう気持ちがあつて。(女性／19歳)

この語りが示すのは、「周囲の皆が日本人なのに、自分一人が日本人ではない」ということである。自分は日本人と外見も言葉も何が違うのかよく分からないが、それでも区別されるということ自体に、ある種の後ろめたさを感じていることがうかがえる。

次に、注目すべきは、周囲の日本人学生との衝突の有無にかかわらず、自らが朝鮮人であると他人に述べるのが、徐々にばかれるようになっていったと答える者が多かったことである。その時期は、小学校低学年あるいは高学年、中学校と若干のばら

つきがあるが、学生生活の経験を積み重ねていくにつれ、そうなると答えた者が多かった。日本名を使用している者は、ごく少数の親しい友人以外には、自らが朝鮮人だと話すことはほとんどなかったという。また、朝鮮名を使用している者は、たとえば少しだが知っていた朝鮮語の「オモニ＝お母さん」などの言葉を、友達の前では使用するのが控えたりしたという。ただし、その理由を明快に答えられた者は少なかった。少数ではあるが、日本では朝鮮人の印象が悪いということを事あるごとに感じたから、と答える者もいた。いずれにせよ、日本学校では自身のエスニックな属性が注目を浴びるのを、極力避けるように行動しようと思ったという類の答えが比較的が多かった。その典型が以下の語りである。

多分、小学校の高学年ぐらいから。…小学校1年生、2年生のときみたいに、無防備に、私は朝鮮人、あなたは何人で聞くとか、そういうのは全くなくなっていましたね。反対に、あえて、これは言わない方が、みたいな感じになっていました、なぜか。(女性／19歳)

学校生活を重ねていくうちに、在日朝鮮人と日本人とは、明らかに区別されるものであり、区別そのものは消去できないものという考えが強固になっていくという。一方で、その区別が、どのようなエスニックな質的内容に起因するものであるのかはインフォーマント自身もよくわからないというのは至極当然のことである。親すらも日本で生まれ育ったインフォーマントにとって、冠婚葬祭などの特別なものを除くかぎり、生活習慣はすでに周囲の日本人のものとそれほど変わらないからである。インフォーマントの語りと照らし合わせても、生活習慣などはすでに区別の強化やトラブルの要因にはならなくなっていることがうかがえる。他方で、学校生活でトラブルをもたらす要因の一つとなっているのが、すでにインフォーマント自身が帰属意識を持っていない南北の朝鮮半島の存在である。

…ミサイルとかなんとか、そのような話があったんですよ。…核作っているんじゃないか、北で。そのときに僕が言われたのが、「お前スパイだろう」とか…。(男性／18歳)

この語りは、インフォーマントが小学生の頃、北朝鮮と総連の関係がマスコミを騒がせた際に、級友に取り囲まれ難癖をつけたられたというものである。このインフォーマントは韓国籍であり、周囲の日本人の級友からの質問に対して「韓国人」と答えてい

たにもかかわらず、このような体験をしたという。

韓国籍ないし朝鮮籍の如何にかかわらず、親の代から日本で暮らしているインフォーマントにとって、朝鮮半島はすでに強い帰属意識の対象ではない。それにもかかわらず、周囲の日本人によって在日朝鮮人と朝鮮半島とが重ねて語られる傾向がしばしば存在し、朝鮮半島に対する印象が日本社会で悪化すれば、在日朝鮮人に対する印象も悪化すると思うと述べる者が、インフォーマントのうちの多くを占めた。特に、現在の日本社会においては、北朝鮮に対する印象が極めて悪いため、それと自らが結び付けられることを極度に嫌悪、忌避している旨を述べる者もいる。

このような朝鮮半島と在日朝鮮人への否定的印象は、インフォーマントらのエスニック・アイデンティティの形成に大きな影響を及ぼすだろうことは容易に想像がつく。たとえば以下のような語りである。

自分自身の自己イメージって、…自分の良いイメージって日本と結構密接に絡んでいるんですよ。で、悪いイメージって朝鮮と絡んでいるんですよ。勝手なイメージなんですけど。それでまたさらに朝鮮を分けると、朝鮮のなかで良いイメージが韓国になって、悪いイメージが北朝鮮みたいなの。(男性／23歳)

この語りから、インフォーマントにとって、日本における朝鮮半島の語られ方が、エスニック・アイデンティティを形成する際に、心理的葛藤をもたらす一要因となっていることが推測される。すでに帰属意識のないインフォーマントにとっても、朝鮮半島は周囲の日本人と日本社会を媒介に、無視することのできない存在として立ち現れているのだ。

ここまで日本学校に在学する在日朝鮮人学生のエスニック・アイデンティティの形成について、インフォーマントの語りを整理してきた。そこで明らかになったのは次のとおりである。①家族や親族を除いては在日朝鮮人同士の関係に乏しい日常生活を送っている。少なくとも学校での日々はそうであった。一部、在日朝鮮人の知り合いがいる者も、それは高校進学以降、学校外で自身が積極的に知り合うための努力を行った結果である。②「日本人であることの否定」という契機は存在しないが、これは自身の親の影響が大きいと思われる。ただし、これは本調査の限界ともいうべきものであり、実際、インフォーマントのなかには、日本学校では自身が在日朝鮮人であることを知らずに生活している在日朝鮮人も存在しえることを推測している者もいる。③「日本人でないことの否定」という契機については、その存在が垣間見える。周囲の日本人学生との関係のなかで、自身のエスニシティの評価をめぐって、葛藤を抱えること

もあり、それへの対応が自身のエスニック・アイデンティティの形成に大きな影響を受けることが確認された。だが、それは先行研究で指摘されていたような在日朝鮮人の生活習慣上の特徴や、貧困な生活実態に起因するものというよりは、自身の意思とは無関係に周囲によって結び付けられる朝鮮半島という存在によるものであることがうかがえた。

### 3-3. 朝鮮学校在学生調査

#### (1) 朝鮮学校在学生調査—前提状況

まずは在日朝鮮人との関係性についてである。そもそもインフォーマントらは朝鮮学校に在学しているので、在日朝鮮人との関係性が欠如しているはずもない。インフォーマントらは朝鮮学校で日々の学生生活を送るなかで、当然のように在日朝鮮人同士の関係を築いている。朝鮮学校での人間関係の性質に関しては以下のような語りがある。

良い友人が集まるって言ったらかわいいですけど、友人関係では朝鮮学校がとてもしっかり父親とか見ている、そういう学校時代の同級とまだつきあっているじゃないですか。社会に出ても、つきあいがある友人っていうのは、やっぱり貴重だと思います。(男性／20歳)

ここで朝鮮学校での在日朝鮮人同士の関係性の特徴の一つとして挙げられているのは、友人関係の親密さである。また、朝鮮学校在学経験者である自身の親の姿などを通して、朝鮮学校での友人関係の親密さが在学期間に限られるのではなく、卒業後も持続しうることを知っていることがうかがえる。別のインフォーマントは、親密な友人関係というのは同級生同士の関係に限られるのではなく、先輩および後輩にまでおよぶことを指摘する。また、学生に限らず教員との関係も密であることがうかがえる。たとえば「よい先生」と出会ったと述べるインフォーマントは、朝鮮学校での教員と学生との関係を、某有名ドラマと照らし合わせて「金八先生とか、そういう関係みたい」(男性／21歳)と表現する。

このような学校内での人間関係における、「友人」および「教員」との親密さに関する肯定的意見は、全てのインフォーマントから聞くことができた。先輩、後輩を含んだ「友人」と「教員」ということは、朝鮮学校に存在するほとんどの人間と親密な関係を築きうるということになる。しかも朝鮮学校在学経験を有する自身の両親の姿を通して、朝鮮学校での親密な交友関係が、卒業後にも継続することを期待しているわけであ

る。在日朝鮮人との関係性の欠如ないし希薄ということは、朝鮮学校在学中のインフォーマントにあてはまらないことは明らかだ。

## (2) 朝鮮学校在学生調査—第一の否定

次に「日本人であることの否定」という意味での第一の否定についてみる。これは日本人であるという自身の認識が否定され、自身が朝鮮人であるという認識を獲得する契機であった。これと関連して、自分が在日朝鮮人であると認識した時期はいつかとインフォーマントに質問すると、「ごく自然に」(女性／19歳)、「気づいたら」(男性／20歳)という答えが返ってきた。要するに帰属の変更に関する記憶があいまいなのだ。なかには率直に、問いそのものに対する当惑を表す者もいる。典型的な語りが次のものである。

え？ 物心ついてからですか？ やっぱり自分の意思でしゃべったりするようになってから…。…俺が保育園は日本の保育園なんですね。その保育園のときも朝鮮って知っていたんです。2歳ぐらい？ え？ (男性／21歳)

2歳時点での自身のエスニシティに関する認識の真偽はここでは脇に置く。重要なのは、思わず返してしまった答えが信憑性に欠けるということに、この問いに対するインフォーマントの当惑が表れていると思われることである。これは現在の時点から過去を振り返って、一貫性をもった形で自己のエスニシティを語りうることを示唆している。そのため当然のごとく「日本人であることの否定」という契機そのものが存在しない、すなわちエスニックな帰属の変更に関する認識がないのである。

## (3) 朝鮮学校在学生調査—第二の否定

「日本人でないことの否定」すなわち「朝鮮人であることの否定」とは、自身が在日朝鮮人であることに対して否定的評価をくだすことである。すでに述べたように、インフォーマントらは自身の朝鮮学校での経験と、朝鮮学校在学経験を有している親の言動を通して、自らが築いた在日朝鮮人同士の関係を肯定的に捉えていた。それでは、自身が在日朝鮮人であることについて、インフォーマントらはどのように評価しているのか。

もっとも多かったのが、「在日朝鮮人でよかった」(男性／20歳)といった類の語りであるが、そう答えた者に、その根拠について踏み込んで聞くと、「…どういったことですかねえ。ははは…」(男性／20歳)と笑ってごまかされるだけである。少なく

ともここには深い自省を通して導き出された理路整然とした根拠はなく、単なる現状肯定にも見える。このような推測をより強くするのが、他のインフォーマントによる次の語りである。

在日朝鮮人で生まれたから、在日朝鮮人で良かったんじゃないですか？日本人で生まれたら日本人で良かったと思うし。アメリカ人で生まれたらアメリカ人で…。(男性／20歳)

ここでは自己のエスニックな帰属に対する肯定的評価が単なる現状肯定にすぎないことが、あからさまに表れている。このような傾向は、たとえば朝鮮半島で生活する朝鮮人と照らし合わせた上での自身の帰属の評価にも表れる。

日本に住む在日で良かったとは思いますが。…朝鮮で生まれていれば、よくわかりませんが、こっちで生まれたから。(男性／21歳)

ここには朝鮮半島とそこで暮らす朝鮮半島の人々に対する羨望のまなごしはない。少なくとも朝鮮半島の人々を規範的モデルとはしていない<sup>9</sup>。同時に在日という状況に対する過剰な意味付与もない。これらの語りが示すのは、インフォーマントらはこの地域に生まれるか、何人として生まれるか、ということに対して肯定的に現状を追認する傾向にあるということである。

そうとはいえ、朝鮮学校在学生が何らかの心理的葛藤を抱えることが全くないわけではない。それは朝鮮学校の存続と関連していることがうかがえる。朝鮮学校の運営が難しくなるなかで、教員にならないかと誘いを受けているが、自身の希望進路はまた別のところにあるというインフォーマントは、その心の葛藤を次のように語る。

私、自分の母校が好きだし、地域の同胞が好きだし。狭い社会だから、知っている人がほとんどだから、私が運動会に行ったときも、「実習で帰ってきていたんだ」って、ひさしぶりに会った友人の母とかが、たくさん、そうやって私に声をかけてくれるし。…そう考えると、学校教育っていうのは、本当に重要だし。みんなが集まる場所って言ったら、やっぱり学校だし。学校を拠点に活性化していくし、同胞社会も。そう考えると…自分に関係ないことではないでしょう。(女性／21歳)



インフォーマントらは朝鮮学校に通うことで、大きな葛藤を抱えることなく、エスニック・アイデンティティを形成することが可能であった。だが、皮肉にも、その朝鮮学校の存続の危機が、インフォーマントらの心理的負担となりうるものが、ここからうかがえる。

ここまで朝鮮学校在学生のエスニック・アイデンティティの形成について、インフォーマントの語りを整理してきた。そこで明らかになったのは次のとおりである。①そもそも日本社会のなかで孤立するのではなく、朝鮮学校在学経験を通じて在日朝鮮人との広く深い関係をもっている。②「日本人であることの否定」という契機も存在しない、彼らは自身のエスニックな一貫性を事後的に構成している。③「日本人でないことの否定」という契機も存在しない、彼らは自身が在日朝鮮人であることを肯定的に評価しうる。だが、その評価の根拠は必ずしも明確なものではなく、現状追認的な性格が色濃いものである。朝鮮半島の人間を規範的モデルとみなすこともなければ、在日という状況に対して充足しているが過剰な意味を付与するものでもなかった。少なくとも先行研究にある「マイナスのアイデンティティ」[浜本1996: 249]などではない。だが、朝鮮学校在学生にとっては、日を追うごとに運営が厳しさを増している朝鮮学校の存続に関する危惧が、心理的葛藤を抱え込む要因となりえることが推測された。

#### 4. まとめ

本論文では日本学校と朝鮮学校在学する在日朝鮮人学生の、それぞれのエスニック・アイデンティティの形成過程と特徴について比較検討した。

日本学校在学する在日朝鮮人学生の多くが、家族や親族以外の在日朝鮮人との関係性が乏しい環境で育ってきた。彼らが日本学校で周囲の日本人学生と関係を結ぶなかで、自身が在日朝鮮人であるということ自体が、心理的葛藤をもたらす要因として浮上することがあり、それへの対応がエスニック・アイデンティティの形成に大きな影響を及ぼすことが確認された。その際に、先行研究で触れられたような、かつての在日朝鮮人が置かれていた相対的に劣悪な生活環境等といったことではなく、日本における朝鮮半島の語られ方が問題を深刻化させる一要因となっていることが見受けられた。

一方、朝鮮学校在学生は、家族や親族以外の在日朝鮮人との関係性が濃密な環境で育ってきた。学校では学生同士だけでなく教員を含めて、親密な関係を築いている。それゆえに、そもそもエスニック・アイデンティティの形成において、深刻な心理的葛藤を抱える機会に乏しい。自身が在日朝鮮人であることは自明のことであると

同時に、それについて明確な根拠や理由はないままに肯定的に捉えることが可能となっていた。先行研究で示唆されていたような、朝鮮半島の朝鮮人を規範としつつも、そうはなりえないことによる心理的葛藤というものも確認できなかった。自身のエスニシティの一貫性を事後的に構成し、それについて現状追認的に肯定的評価をくだせるというのは、エスニック・マイノリティのアイデンティティの特徴というよりは、マジョリティのものに近いといえる。

だが、朝鮮学校在学生がエスニシティと関連して心理的葛藤を抱えることが全くないわけではない。朝鮮学校の存続に関する危惧が、葛藤の要因の一つとなっていることがうかがわれた<sup>10</sup>。これは、日本学校に在学する在日朝鮮人学生の葛藤が、主に対面状況における具体的な記名の他者との関係において起こりうるものであったこととは、対照的である。

以上のように、多様化した在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティの形成において、通った学校とそこでの体験が及ぼす影響は大きいと同時に、日本学校と朝鮮学校では影響の性質も大きく異なることが確認された。もちろんそれぞれの学校に在学する在日朝鮮人学生のなかには、本論文での指摘にそぐわない者もいるだろう。だが、本論文での指摘は、それぞれの学校の在生学生をある程度俯瞰してみれば、傾向として抽出できるものである。

現在、日本社会と朝鮮半島の間は刻々と変化しており、それとともに在日朝鮮人がおかれた状況も変化している。今後、在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティはさらに多様化していくであろう。多様化が進む中で、在日朝鮮人内部における個々人の特徴を徹底的に捉えることはもちろん重要だが、在日朝鮮人の中でも限られた範囲の人々に共通して存在する一定の傾向を捉えることも、また重要である。たとえば在日朝鮮人のアイデンティティを、帰属するコミュニティの不在等に起因する葛藤を孕んだものとして捉える論考は、2000年代に入っても目にすることができる。「疎外」された者としての在日朝鮮人のアイデンティティ論を参照しつつ、そこから逆説的にナショナリズムに回収されない人々のありようを模索する論考はその典型の一つであろう[大澤2007]。一方で、一群の在日朝鮮人のある種の愉快的連帯感と、よく言えばたくましい言動を描写した作品も目にする。在日朝鮮人の特定の若者たちの刺激に富んだ日常生活を描いた映画『パッチギ』（2006年公開）は、その典型ではなかろうか。これらに描かれた在日朝鮮人像に違いが生まれる理由は、本論文におけるここまでの記述によって容易に推測できる。「在日」という一つのラベルに括られているとはいえ、それぞれの論考や作品において扱われている具体的な対象が実は違うからである。この場合は、通った学校とそこでの体験が要因の一つとなるのであるが、この要因の違い

に基づく特定の人々に特徴的な傾向が捨象されて、「在日」という一つのラベルに回収されたとき、結果として、相反する特徴が併存する「ぬえ」的存在としての表象ができてあがるのではなかろうか<sup>11</sup>。

このような乱暴な認識を解消する上で、多様化する在日朝鮮人の個人の特徴を踏まえながら、同時に、在日朝鮮人のなかでも特定の人々に偏在する部分的共通性を把握することも必要と思われる。本論文は、この方向でさらなる展開が望まれる研究の一つの基礎を提供するものである。

---

[注]

<sup>1</sup> 1952～2011年の累計。浅川晃広の研究[浅川2003: 14-15]および『法曹時報』より算出。

<sup>2</sup> 民族学校には、本論文で対象とする朝鮮学校の他に、韓国学校がある[在日本大韓国民団中央本部編1998]。

<sup>3</sup> 近隣に家族以外の在日朝鮮人がいたとしても、互いがそれを知らないということを示す体験談の一つに「私は日本人ばかりで、朝鮮人がいない地域で育ちました。…引越してからは学校で朝鮮人と分かるのは自分のきょうだいだけでした。じつは他にもいたんでしょうが、分かりませんでした」[皇甫2001: 68-69]という皇甫康子のものがある。

<sup>4</sup> 金泰泳は同時に、日本社会の圧力に対抗する手段としての「在日アイデンティティ」の歴史的意義のみならず、現在における必要性についても指摘している[金1999, 2005]。

<sup>5</sup> 「共生志向」タイプは日本社会での民族的出自を異にする者が共に生きていける社会を築いていこうというタイプ、「祖国志向」は朝鮮半島の発展に寄与するため在外公民として生きていこうとするタイプ、「個人志向」タイプは個人的努力による自己実現といった形で社会的上昇をはかろうとするタイプ、「帰化志向」は日本人に一体化することで障害を避けようとするタイプ、「同胞志向」は「共生志向」と「祖国志向」との間地点に位置するタイプという[福岡1993: 88-99]。

<sup>6</sup> 朝鮮学校の詳細な学生数が未公表のため、正確には把握できないが、比率としては同年代の在日朝鮮人の中でも決して多くはないと指摘されている。福岡安則は1986年時点で約13パーセントと推定している[福岡1993: 55]。

<sup>7</sup> エスニシティの形成に及ぼす成育地域の特徴の一つとして、当該地域におけるエスニック・グループの人口密度、いわゆる集住の程度が挙げられる。だが、日本生まれの在日朝鮮人のエスニシティの形成に「成育地域内同胞数」が及ぼす影響は、「受けた民族教育の程度」や「成育家庭内の民族的伝統性」に比べて、それほど大きくないことが福岡と金の調査研究で明らかになっている[福岡・金1997]。ただし集住地域の方が、民族教育への接近可能性が相対的に高くなりやすいと推測することはできる。これらを鑑みるに、従来、想定されがちであった集住地域の影響というのは、「受けた民族教育の程度」をはじめとする諸要因が分節化されずに混淆されていたものと思われる。そのため、教育経験といったエスニシティの形成に影響を及ぼすだろう諸要因を丁寧に分節化した場合、成育地域の特性というものは、その他の諸要因への接近可能性等を除くと、それ単独ではそれほど重要な論点とはならないと想定することができる。本論文の日本学校在学生調査のインフォーマントの成育地域による影響は、民族学習プログラムへの接近可能性ということになろう。

<sup>8</sup> 朝鮮学校在学生調査のデータを用いた、エスニック・アイデンティティの形成とコミュニティへの帰属に関する分析はすでに発表済みである[曹2011, 2012a]。また、日本学校在学生調査のデータを

用いた、エスニック・アイデンティティの形成に及ぼす朝鮮半島に対する認識の影響についてもすでに発表済みである[曹2012b]。

- <sup>9</sup> 2002年の当時の小泉純一郎総理大臣の訪朝以降、日本社会では北朝鮮に対する批判が高まったが、そのような現象について「驚きました」（男性／21歳）と当惑を表明するインフォーマントはいたが、自身への深刻な影響を述べる者はいなかった。また、今後の日本社会の動向についても比較的に乗観視している者がほとんどであった。ただし、これは北朝鮮に対する批判が極端に高まりはじめた時期に、インフォーマントらがすでに高級部3年以上という一定程度の年齢に達していたことが大いに影響していると思われる。一方で、インタビュー当時は、2009年12月18日付『東京新聞』が報じた京都朝鮮第一初級学校に対する団体抗議活動の類は、まだ起きていなかった。北朝鮮に限らず、在日朝鮮人を含めた朝鮮半島とそこに由来するもの全てを対象とする非難、朝鮮学校を直接の対象とする攻撃的な主張を目にすることが珍しいことではなくなった現在、特に小学校に相当する初級部に在籍するような低年齢層にとっては、朝鮮半島と在日朝鮮人をめぐる日本社会の動向が、大きな心理的負担となっていることも推測される[宋2012: 253-254]。朝鮮半島と在日朝鮮人、朝鮮学校に対する日本社会のまなざしの昨今の急激な変化が、朝鮮学校在学生に及ぼす影響を捉えることは、今後に残された課題の一つである。
- <sup>10</sup> 2010年から実施された「高校無償化」の対象から、朝鮮学校高級部が除外されている昨今では、朝鮮学校をめぐる日本社会の対応、特にその制度的処遇をめぐる動向が葛藤の要因となりうることが推測される。たとえば2013年2月21日付『朝日新聞』が報じた、朝鮮学校の「高校無償化」除外に際して「残念さと憤りがぐちゃぐちゃになって、整理できていない」という朝鮮学校在学生のコメントが、それを裏付けている。
- <sup>11</sup> 在日朝鮮人を論ずる者の多くは、在日朝鮮人内部における部分的特徴の多様性について、十分に知っているであろう。だが、予備知識が乏しい状況で、多様な論考が「在日」という単一のラベルに括られた上で人々に受容される時、そこで起きるのは、マイノリティに対する都合のよい消費ということにならないだろうか[韓2008]。

## [文献]

浅川晃広, 2003, 『在日外国人と帰化制度』新幹社。

曹慶鎬, 2011, 『朝鮮学校コミュニティ』とエスニック・アイデンティティ 『ソシオロゴス』, 第35号: 96-110。

曹慶鎬, 2012a, 「在日朝鮮人コミュニティにおける朝鮮学校の役割についての考察」『移民政策研究』, 第4号: 114-127。

曹慶鎬, 2012b, 「アイデンティティの形成と『本国』イメージの問題」宮島喬・杉原名穂子・本田量久編『公平な社会とは——教育、ジェンダー、エスニシティの視点から』人文書院。

皇甫康子, 2001, 『「在日」女性が聞き取る『解放運動の中の女性』たち』反差別国際運動委員会編『マイノリティ女性が世界を変える！——マイノリティ女性に対する複合差別』解放出版社, 68-87。

韓東賢, 2005, 「メディアの中の『在日』と『朝鮮学校』、そのリアリティのありか」『現代思想』4月号(Vol. 33, No. 4), 214-223。

韓東賢, 2008, 「新しいナショナリズム」と(疎外)感——サバイバルへの処方箋と在日朝鮮人 『書評ソシオロゴス』 No.4, 1-15。

福岡安則, 1993, 『在日韓国・朝鮮人——若い世代のアイデンティティ』中央公論新社。

福岡安則・金明秀, 1997, 『在日韓国人青年の生活と意識』東京大学出版会。

浜本まり子, 1996, 「在日朝鮮人——在日朝鮮人のアイデンティティの問題」青木保他編『移動の民族誌』岩波書店。

姜在彦, 1976, 「在日朝鮮人の六十五年」『季刊三千里』第8号, 22-37。

- 姜在彦, 1980, 「戦後三十六年目の在日朝鮮人」『季刊三千里』第24号, 26-37.
- 金泰泳, 1999, 『アイデンティティ・ポリティクスを超えて』世界思想社.
- 金泰泳, 2005, 「在日韓国・朝鮮人の変貌——日本社会と在日アイデンティティの現在」梶田孝道編『新・国際社会学』名古屋大学出版会.
- 金徳龍, 2004, 『朝鮮学校の戦後史—1945-1972〔増補改訂版〕』社会評論社.
- 大澤真幸, 2007, 『ナショナリズムの由来』, 講談社.
- 朴三石, 2011, 『教育を受ける権利と朝鮮学校——高校無償化問題から見えてきたこと』日本評論社.
- 下喜載・全哲男, 1988, 『いま朝鮮学校で——なぜ民族教育か』朝鮮青年出版社.
- セフルム編集部編, 2004, 『セフルム』10号.
- 宋基燦, 2012, 『「語られないもの」としての朝鮮学校——在日民族教育とアイデンティティ・ポリティクス』岩波書店.
- ウリハッキョをつづる会編, 2001, 『朝鮮学校ってどんなところ?』社会評論社.
- 山本かほり, 2013, 「朝鮮学校における『民族』の形成——A朝鮮中高級学校での参与観察から」『愛知県立大学教育福祉学部論集』第61号, 145-160.
- 在日本大韓国民団中央本部編, 1998, 『図表で見る韓国民団50年の歩み〔増補改訂版〕』五月書房.
- 『国勢調査』『在留外国人統計』『法曹時報』各年版.